16歳の女性。排便時の肛門痛と37℃の発熱を主訴に来院。

現病歴：14歳ごろより痔核を認め、市販の軟膏薬を使用していた。今年に入り１日10行以上の水様下痢と40℃の発熱を認めた。その後抗菌薬や整腸剤、消化性潰瘍治療薬などを処方されたものの症状は改善せず、CTにて遠位回腸の壁肥厚を指摘された。また、便中C.difficile陽性であり、偽膜性腸炎と診断された。その後、咽頭痛のために飲水困難で、治療目的に入院した。

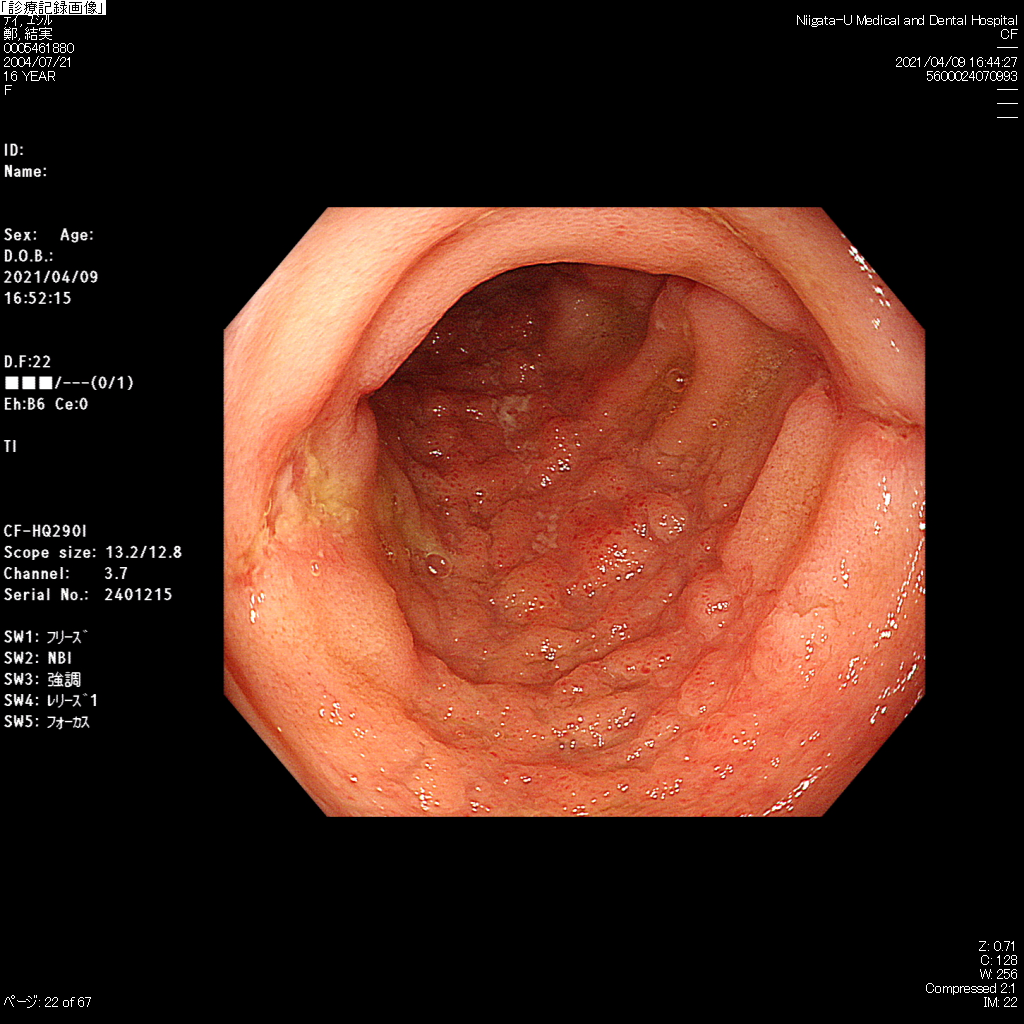
既往歴：注意欠陥・多動性障害に対しメチルフェニデート、アトモキセチン内服中

家族歴：特記事項なし

現症：体温37.6℃、血圧114/71mmHg、脈拍76回/分、軟口蓋に多発アフタを認める。下部消化管内視鏡にて、終末回腸に敷石状粘膜、縦走潰瘍を認める。肛門の12時方向に裂肛瘢痕と皮垂、６時方向に潰瘍を認める。

入院後の下部消化管内視鏡検査画像を示す。

図１



1.偽膜性腸炎の治療薬として正しいものはどれか。２つ選べ。

a.バンコマイシン

b.クリンダマイシン

c.メトロニダゾール

d.エリスロマイシン

e.ペニシリン

2.診断として最も考えられるものはどれか。

a.潰瘍性大腸炎

b.ベーチェット病

c.Crohn病

d.大腸癌

e.腸結核

3.この疾患の治療の第一選択としてふさわしいものはどれか。

a.内視鏡的治療

b.外科的治療

c.5-ASA

d.アザチオプリン

e.リファンピシン

解答

1.a,c

2.c

3.c

59歳の男性。５年前に高速道路で痙攣をおこし、救急搬送。アンモニア高値、MRI T1強調像にて淡蒼球と大脳脚の高信号から肝性脳症を疑われ、その後の腹部CT、エコーにて肝内に単発性の占拠性病変を指摘された。その後当科紹介され、腹部エコーにて35mm大のHCCを認め、これに対しTACEと放射線療法を施行。その1年後にS8に新たに二つの肝内転移が発見されTACE施行。３か月後に更にS6にも二つの肝内転移が発見され、これにもTACEを施行した。その後も肝内転移が多発し、副腎にも転移が発見されたため、一昨年ソラフェニブ導入。投与間隔を調整しながら治療していたが副腎病変の増大が見られたため、今回ATZ+BEV導入目的に入院。

既往歴：中咽頭癌(ESD後) 脾静脈血栓・門脈右枝血栓

現症：体温36.7℃、血圧104/69mmHg、脈拍70回/分、意識清明、眼球結膜に黄染を認めない。腹水貯留なし。

検査所見：WBC 7310/µL (Neu 54.2%)、Hb 9.8g/dL、Plt 36.9万/µL、AST 54U/L、ALT 45U/L、ALP 93U/L、γ-GTP 72U/L、LDH 193U/L、T-Bil 0.9mg/dL、アンモニア 100µg/dL、TP 7.30g/dL、Alb 3.5g/dL、BUN 19mg/dL、Cre 1.01mg/dL、Na 136mmol/L、K 3.9mmol/L、Cl 105mmol/L、Ca 8.8mg/dL、CRP 0.23mg/dL

1.肝細胞癌の原因として一番多いものはどれか

a.アルコール性

b.Ｂ型肝炎

c.Ｃ型肝炎

d.NASH

e.自己免疫性肝炎

2.肝細胞癌に対するTACEの適応となるのはどれか

a.難治性腹水がある

b.門脈本幹に腫瘍塞栓を認める

c.肝両葉に腫瘍が多発している。

d.PT 25%である

e.黄疸を認め、総ビリルビン6.3mg/dLである

3.分子標的薬単剤投与時の副作用として起きにくいものはどれか。

a.下痢

b.手足症候群

c.免疫関連有害事象（irAE）

d.腫瘍崩壊症候群

e.間質性肺炎

解答

1.c

2.c

3.c